

大沼法竜著

宗訓

敬行寺發行

は し が き

浄土真宗の定規をはなれては、浄土真宗ではありません。彌陀の本願に真仮があり、釈尊の三部經に隱顯があり、宗祖の聖教に真実権仮があり、蓮師の著書に專雜の教えがあるのに、信前信後を説かなかつたら、浄土真宗の定規をはずれているのではないでしようか。真仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失してはなりません。左に傾いてはならないといつも心がけている人はいつしか右に傾いており、右に傾いてはいけなさと注意しているものは、知らず識らずのあいだに左に傾いており、傾くまい傾くまいと右顧左眄するものは、進みきらない。常に機に傾いてはならないと心がけている人は、いつしか法に溺れており、法に傾いてはならないと注意しているものは、いつしか機に墮している。機にも法にも偏してはならないと心得ている人は、信仰が曖昧で切れ味がない。ある婦人が娘に遺言「信仰は、わかるまで聞きなさい

いよ、しかし、わかったのが信仰ではないぞ」と言つて息が切れたそうですが、わかるまで聞きなさいよ、しかし、わかったのが信仰ではないとは、尊い遺言であります。言葉でなければ導かれませんが、言葉をはなれなければ信仰ではありません。話がわからなければ信仰の極致に進むことができますが、理解ができ、合点したのは学問であり、智慧でありますから、それは信仰ではありません。

「たとい八万の法蔵を知るといふとも後世を知らざる人を愚者とす、たとい一文不知の尼入道なりとも後世を知るを智者とすとしるべし」と仰せられてありますが、あのお経にはああ書いてある、このお聖教にはこう書いてあると知つても、それは書かれた方の信仰であつて、紙背に溢れている親の念力と一体になつた体験がなければ、撰取されたのではないのですから「わかつたのが信仰ではないぞ」と、体験せよと無言の世界を教えている母親が尊いのです。

一本の線を引いたのでは、長短はわからない。第十八願は眞実であつても、扱う人

が真実の境地に立っていないければ、真実を發揮することができない。真実と方便とならべて見せてこそ、真実の真実たる所以を知ることができるので、仮を仮と知らな  
いものに真実のわかるはずがないから、真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷  
失すると仰せられたのであります。

第十八願を聞損の機が第二十願の行者であり、もう一桁落としたのが第十九願の  
行者であります。仏さまは私たちの根機をご承知のうえで、方便の願を建立しておら  
るるけれども、自分の機を知らない衆生は、自分は第十八願の機類だと自惚れている  
だけです。第十八願をこんなに読んでいる人は、救われてはいないのです。

設い我が仏になりましても、十方の衆生が至心に信樂（信心正因）して我国に生れ  
んと欲し、乃至十念せん（称名報恩）、若し生れずば正覚を取らず、と誓うておいで  
になるが、もう正覚を取っておいでになるから往生に間違いないと安心して、唯除五  
逆誹謗正法は阿闍世と提婆のことで、私は素直に聞いているから、そんな言葉とは無

關係だと安心しておいでのになるのが真宗一般の方ですが、それは文字を読んで合点しておいでのになるだけだから、紙背が読めていないから救われてはいないのです。

「信心獲得すというは第十八願の願の心得なり、この願の心得るといふは南無阿彌陀仏のすがたを心得るなり」ですよ。第十八願を巻きあげたのが六字の名号ですよ、六字の名号は光明無量、寿命無量ですよ。阿彌陀さまは慈悲のお方と申しますが、慈悲の裏には智慧があり、智慧の裏には慈悲があり、一方に偏したら、真実の智慧と慈悲の覚体ではありません。

光明無量に照らし出されたのが唯除五逆誹謗正法の八文字の正所被の機ですよ、寿命無量の慈悲に生かされたのが若生者不取正覚の八文字の真実の法ですよ。

あなたは話に聞いているだけで、あなたが逆謗の屍で除かれたという実感がありませんから、若生者の念力に攝取されたという体験がないから至心信樂己を忘れた大慶喜がないのですよ。若生者は身命終ではありませんよ、心命終ですよ。唯除逆

謗が大懺悔となり、若不生者が大歡喜となるのですよ、これを真宗の嬉し愧ずかしの生活というのですよ。

この大歡喜、大懺悔の境地に到達するまでの階段が、第十九願と第二十願でありま  
す。この階段を権方便というのですが、これを歩まずに第十八願に趣入したつもり  
でおいでのなるから觀念の遊戯といい、私が贖物の信仰と言っているのです。第十八願  
の真似をしている贖物の信仰には、慶喜がありません。凡夫は煩惱があるから喜ばれ  
るものではない、と真宗の道俗はおっしゃるが、それは間違いです。摂取されていな  
い、助かっている、仏凡が一体になっていないから、慶げられないのです。死んだら  
お助けと思っているのですから、今が助かっているから喜ばれないのです、平生業  
成が徹底してないから喜ばれないのです。この者をお助け、どこでお助けですか、  
死んだらお助けと言っているのですから、生きている間は助かっているのです、こ  
れを機法合体というのです。合体だから、調子のよいときには御恩々と喜びますけ

れども、調子の悪いときには、こんな心が出るようでは「ひよっと墮ちはせぬか」の不安の心が出るから、憶念の心つねにして仏恩報ずる思いありにならないのです。

第二十願の行者は憶想聞断するが故に、と善導さまがこれを雑修の行者の失の中に入れておられますが、第十八願の専修の行者は機法一体、仏凡一体になっていますから、煩惱と菩提とは常に一体に作用しているから、喜ばない通しが喜び通しになっています。

聖人の現生十種の益でも見てごらんなさい、金剛の真心を獲得すればですよ、金剛の真心を獲得していないから十種の利益がないのですよ。第二に至徳具足の益、第三に転悪成善の益、第七に心多歡喜の益、第九に常行大悲の益、これを開けばこの世の利益きわもなしですよ。

罪障功德の体となる

氷と水のごとくにて

氷おおきに水おおし

障り多きに徳おおし。

名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もとどまらず

衆衆の万川帰しぬれば

功德のうしおに一味なり。

尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば

智恵のうしおに一味なり。

こんな尊いご利益は読んでいないのでしようか、読んでも、体験がなければ味はとれないのですよ。法のお助けを死後に眺めているから、喜びが今出てくるはずがありません。

大悲大願の海水に、煩惱の衆流帰しぬれば、智恵のうしおに一味なりです

よ。帰入していかないから、仏智の不思議が顕われないのですよ。帰入功德大宝海、開

入本願大智海とありますが、帰入したのなら仏凡一体ですよ、開入したのなら機法一

体ですよ。仏智の不思議と一体ですから、不可称不可説不可思議の功德は行者の身に

満ちているのですよ。慶びの出ないのは合点しただけで、体験していかないからです

よ。信前の境地にいて、信後に入っていないからですよ。合点しただけで、一念の信



を突破していかないからですよ。贖物であって、真物でないからですよ。心多歎喜の益を頂いていないからですよ。正信偈には「三不三信誨慙」とか、「専雜執心判淺深」とか、歎異鈔には「おほよそ聖教には真実権仮ともに、あひまじはりさふらうなり、権をすて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてはさふらへ、かまえてく聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ」。念仏に向いておればみな真実と思つてゐるけれども、万行随一の念仏、万行超過の念仏、自然法爾の念仏と区別のあることを知らなければなりません。そんな難しいことを言つても同行にはわからない、いやお説きになるあなたが判らないのではありませんか。名号を眺めてゐるのは方便ですよ、権仮ですよ、名号と一体になつたのが真実ですよ、真実にならなければ真実報土には往生はできませんよ。各自の根機を照育するのが、第十九願、第二十願の調機誘引の随他意の方便の願であり、己れから果遂さしていただくのが第二十願の果遂の誓いで、果し遂げさしていただいたところが第十八願の随自意の

眞実しんじつの願がんに帰入きにゆうさしていただいたのですから、方便ほうべんを方便ほうべんと知らしていただかなければ眞実しんじつに帰入きにゆうしてはけません。眞実しんじつに帰入きにゆうしてこそ、今いままで方便ほうべんの桁けたで危あぶない芸当げいとうをしていたことに驚おどろいて大慶喜だいきよろこするのであります。この浄土眞宗じょうどしんしゅうの定規じょうぎを宗訓しゅうくんと名づけ、彌陀みだの本願ほんがんから蓮師れんしの聖教しょうきょうにより私わたしの实地じつちの体験たいけんを通して書かかしていただきます。お氣きに召めさないところがありましたらお赦ゆるしてください、自分じぶん々々ごんごんの程度ていどで味あじわっているのですから、仕方しかたがありません。合掌がっしょう